

## 日本語の世界を探索する (三)

### —日本語の男女差を考える—

三宅 和子

日本語は男女差が大きい言語だといわれてきた。しかし近年は「女が男のような言葉を使う」、「男と女の差がなくなっている」といった議論もたびたび耳にする。現代日本語の男女差はどれほどあるのだろうか…言語研究者ならずとも湧いてくる自然な疑問であろう。今回は、その疑問にそれぞれ異なる視点からチャレンジした3名の学生の研究を紹介しながら、日本語の男女差について考えたい。また、それを通して、現代語の研究は日々の言語行動の観察から材料を見出すことができることを示し、私たちがいま現在使っている言葉を再発見する楽しみを伝えたい。

#### 一 日本語の男女差

言葉の男女差の研究は世界的には「言語とジェンダー研究」として位置づけられてきた。男女差といっても、約6000種類あるといわれる世界の言語は、その異なり方もさまざまである。まず、英語のように基本的には男女差がほとんどないものの、感嘆詞や形容詞などの語彙レベルの選択に男女の差が現れやすい言語がある。次に、日本語のようにさまざまな品詞や句、談話レベルで選択や使用傾向に男女差が見られる言語がある。そしてまた、アメリカインディアン諸語のように、男性語・女性語が別れていて、男性語は男性同士で使われるが、女性語は女性同士あるいは男性が女性に対して使われるといった男女差が著しい言語もある。もちろん、世界の言語がこれらの3種類に明確に分かれるわけではなく、さまざまなコンビネーションやグラデーションが見られる。

日本語は、よく知られている言語の中では比較的男女差が大きい言語とされるが、実際には、男性と女性が厳密に言葉を使い分けているというわけではなく、1) 相対的にいって男性に使用されがちな語と女性に使用されがちな語がかなり多くある、2) 男性語が一般的基準としてあり、それと異なる女性の言葉を女性語として特徴的に語られる傾向がある、という指摘ができよう。

なお、男・女という二項対立で言葉の差を考えること自体、特定のイデオロギーに支えられた行為であるという批判もある。しかし紙幅の関係上、その議論は別の機会に論じることとし、話を進めたい。

日本の女性語については、国語学者の菊沢季生が「婦人の言葉の特徴に就いて」(『国語教育』1927,14-3号)、続いて「国語位相論」(『国語科学講座 3』1935 明治書院)を発表したのが概説としては最も早いといわれている。菊沢は女房詞を上品で優美な女性語としてとらえたが、爾来、女性語一般の特徴として、丁寧でやさしいといったイメージが人々の意識に定着している感がある。21世紀になった現在でも、女性の言葉に対しては、以下のような規範的な特徴がしばしば指摘される。

1. 丁寧である（「お」をつける→「おみかん」、「です／ます」が多いなど）
2. 敬語の使用が多い
3. 女性特有の文末詞が多い（「～だわ」「～の」「～かしら」「～てよ」など）
4. 女性特有の感嘆詞が多い（「あら」「まあ」など）
5. 女性特有の強調が多い（「とっても」「すごく」など）
6. 女性特有の自称詞が多い（「あたくし」など）

だが、現代の若者の日常の言葉を観察してみると、このような「女性らしい」特徴を見つけることのほうが困難である。冒頭述べたようなコメント「男と女の差がなくなってきた」というのも、当を得ているように感じられるかもしれない。

ただ、特に若い人の場合でも、話し言葉では女性の話し方らしいとすぐに気づく手がかりは、実はいくつもある。まず、声を聞けば当然ながら女性かどうかはすぐ分かってしまう。しかし、これは声の質だけが判断材料になるのではなく、ピッチの高低、速度、ポーズのとり方、イントネーションの高低など、さまざま音声学的な要素がかかわっている。さらに、話し方のパターンや会話の流れという談話管理や対人関係処理の方法にも、女性的な傾向が見出せるのである。

このように、女性と男性の言葉遣いの差は、単に単語の選択レベルで見ているとは分らないことが多い。以下では、私のゼミの学生が行なった 3 種類の調査を紹介しながら、異なるレベルで見られる男女差を確認したい。

## 二 異なるレベルの男女差

ここでは学生 A、B、C が行なった 3 つの観点からの調査を紹介する。

### （一）学生 A オネエ言葉にみる「女らしさ」

学生 A は TV ドラマや映画で男女差がどのように表現されているか、そして「女言葉」と「男言葉」は私たちの間でどのように了解されているのかに興味を持った。「若い女性は『男言葉』を使う」とよく批判されるが、男性が女言葉を使うこともあり、その場合の受け取られ方は、女性が「男言葉」を使う場合とは異なる。その典型がいわゆるオネエといわれる人たちの「女言葉」である。だが、オネエ言葉は「女言葉」そのものであろうか。学生 A は卒論で、そのことを考える一環として、映画の中に現れたオネエ言葉を調べた。4 本の邦画からオネエ 8 名、女性 8 名を選び、登場人物の発話を文字化してオネエの言葉と女性の言葉を比較した。「女言葉」は文末や自称詞・他称詞に特に顕著に現れるといわれるが、これら 4 作品では、オネエのほうが女言葉といわれる文末詞（たとえば「～だわ」「～の」「～かしら」）を多く使っていたことが分かった。また、文末ではオネエ、女性ともに「ね」と「よ」の使用が最も多かったが、オネエは「よ」、「ね」の順で多く、女性は「ね」、「よ」の順であった。「よ」の自分の気持ちを強調する機能、「ね」の相手との共感を求める機能が、オネエと女性のこの 2 つの終助詞の使用頻度順の差に反映していることが示唆される。加えて、オネエのほうが自称詞・他称詞においても「女言葉」（「あたし」、「あんた」など）を多く使っていること、女性の場合は「男言葉」（「おれ」、「おまえ」など）も使っていること

報告している。また、この4本の邦画のなかに監督自身がゲイの映画が含まれていたが、その中のオネエは、他の映画より「女言葉」が少なかったという。これは、ゲイでない監督の、オネエに関するステレオタイプ的なイメージが、オネエにことさら「女言葉」を多くしゃべらせていた可能性を示している、興味深い。

## (二) 学生 B 男女の会話における性差

学生 B は、若い男女の言葉の性差を談話の中から見ようとした。まず 22 歳の親しい友人同士男女 2 名ずつの自然会話を録音し、それを文字化した。次に文字化したものを一文ずつに分けて番号を振り、男女各 25 名ずつ（平均 21.4 歳）に見せた。そして発話者の性別を判断させ、判断理由についても自由記述させた。この結果、判断基準を文末表現と呼称（自称詞・他称詞）においていたものがやはり多かった。呼称はこれまでの調査でも絶対的な男女差が現れることが報告されており、学生 B の調査でも同様の結果がでた。また文末表現に関しては、「～よ」、「～な／～なあ」など、男女で共通して使っているものが多かった。しかし男性で最も使用が多かったのは「～ね」で、女性では「～じゃん」であった。発話者がわずか 4 名のため個人差を否定できないが、「～じゃん」のように従来男性に多く使われるといわれていた文末詞が、現在若い女性に多く使われていることは、注目に値する。もうひとつの発見は、これまで言われてきたように「女性が男のような表現をしている」というより、「男性が女らしい表現をしている」ということである。これは、実際には男性が発話した文でありながら、「女らしい表現をしているので女だ」と判断された文が、男性の文のうち 3 分の 1 以上を占めていた結果による。つまり、若者が女らしい表現だと意識している表現を、実際には男性が頻繁に使っているということである。

この調査の面白いところは、単に若い男女の談話を見ただけではなく、その文字化資料を同じく若い男女に見せて男女の異なりを判断させ、その判断理由を聞いていることである。若者の男女差の判断や規範意識が従来のものとかなりずれていること、また意識と実際の使用との差もかなりあることが見えてきている。これをさらに異なる世代の被験者で調査してみると、いっそう深みのある研究になりそうだ。

## (三) 学生 C ケータイメールにおける男女差

学生 C は携帯電話のメールにおける男女差に興味を持った。私のゼミでは平成 15 年度に携帯メールのメッセージをさまざまな角度から分析したが、その調査でも男女差が確認された。学生 C はそれらを踏まえながら、男女学生 60 名に対するアンケート調査を下敷きに男女差を見た。調査は大きく二つに分かれる。まず、調査の内容を

「飲み会に誘われたのを断る（断り）」「ノートを貸してもらあさいちう（依頼）」「朝一で出かけた授業が休講だったのをぼやく（非用件）」の 3 場面に分け、男性と女性に対してどのようなメッセージに書くかを聞いている。このように談話を発話行為の観点から見ていく方法は、語用論の研究として位置づけられるが、学生 C はこれを携帯メールの分析に応用した。「断り」では男女ともに「謝罪＋理由＋断り」（例えば「ごめん、その日バイトだからいけないよ」）といったパターンが最も多い。しかし男性から女性へ

のメッセージには、同パターンに加えて、「残念」とか「また今度誘って！」などを付け加えることが多い。いっぽう女性から男性へのメッセージには「その日バイトだから行けない。ごめんなさい」といった「理由+断り+謝罪」のパターンが多くなるという。さらに、「依頼」、「非用件」のメッセージについても、異性に出すときには男女間で発話の順序や内容に異なりが多く見られた。

次にメッセージの言語表現を見てみると、女性のほうが一文もメッセージ全体も長く、絵文字・顔文字などをふんだんに使う傾向が見られる。しかし、男性に対しては異なる傾向が見られ（少し距離を置く傾向）、反対に男性は女性に合わせてより女性に近いコミュニケーションをとる傾向が見られた。また、文末表現に関しては「ね」、「よ」の使用が多いが、相手の性によって変化するうえ、断り／依頼／非用件の3場面で異なる使い分けが見られることが分かった。

詳細を述べる余裕がないのが残念だが、この調査から示唆されるものは豊富にあり、さらに被験者数や分析項目を増やすことによって、注目に値する結果が期待できたはずである。また、先に紹介した2つの調査と比較することでさらに興味深い方向性が見えてくる。

### 三 まとめ

もう一人の学生のレポートによると、女子学生のほぼ100%が「汚い言葉はやめなさい」と注意された経験をもつという。「汚い言葉」とは、ほとんどの場合「男のような言葉」のことである。例えば「ハラへった」という言い方をすると女性は注意されるが、男性で注意されることはほとんどない。男性が注意されるのは、乱暴だったりののしったりする言葉遣いするときである。つまり、女性は男のような言葉を使うことが「汚い」と判断されるのに対し、男性は人を粗末に扱ったり見下したりするような言葉を使う場合に「汚い」と判断されるのである。

公文書や研究論文などの書き言葉、講演のような話し言葉といった公の場の改まった言葉遣いは、男性中心に作り上げられている。しかし男女ともにそれに沿って書くことが期待されている。ところが、手紙やメモのような私的な書き言葉や普段の話し言葉になると、男言葉と女言葉に分かれるといえよう。そしてそこでは、女が男のように話すと「品性」を疑われる。いっぽう男が女のような話し方をすると、男の「性」を疑われるということが起こる。

なぜこのような非対称性があるのか、またこの非対称性が皆に意識されていないのはなぜなのか、規範が破られたときの人々の感情的なリアクションはどのような意識に根ざしているのかなど、興味は尽きない。このようなことをひとつずつ、丁寧に解明していくことが、社会と言葉の使われ方の関連を追及する研究としては大切である。

現代語の研究の材料はこのように、私たちの身の回りにいくつも転がっている。これまでの先行研究の積み重ねから学ぶことはもちろん大切だが、発想とデータに関しては、大学生でも面白い発見や貢献ができるのが、現代語研究のエキサイティングなところなのである。

最後にひとこと付け加えたいのは、何かを学ぶということは、面白い発見をまさに「自分のものにしていくプロセス」であるということだ。